

狂言「財宝」考

——三番叟（翁猿楽）との関連——

稲田 秀雄

はじめに

狂言においては、老翁は一樣に祖父おふじと呼ばれる。文字通り、孫とともに登場する場合がほとんどである（「枕物狂」「孫聲」「腰折」「薬水」等）。本稿で論じようとする「財宝（才宝）」^①も、そうした祖父をシテとする狂言の一つである。

三人の孫が名を付けてもらおうと、財宝（才宝）という名の裕福な祖父を訪れ、各々変わった名を与えられる。その後盃事を行い、孫や祖父の舞などあつて、最後は祖父が拍子にかかって孫たちの名を呼び、めでたく終了する、という筋である。現在大蔵流では脇狂言、和泉流では雑狂言に分類されている。

従来、この狂言について、単独で論究されたことはなかった。本稿では、本曲と翁猿楽——特に三番叟との関連について検討し、狂

言の形成に関する一つの問題提起としたい。

一、「さいほう」という名

本曲は、最古の狂言文献である天正狂言本にはなく、今のところ中世に遡る上演記録も見当たらない。しかし、大蔵・和泉両流の最古本たる虎明本・天理本にはそれぞれ収められており、少なくとも江戸初期までに成立していたことは疑いない。ただし、大蔵流においては、虎明本には存するものの、それに次ぐ虎寛本では珍敷狂言の扱いになっており、正規の演目となるのは明治以降のことである。また、鷺流仁右衛門派でも同様に珍敷狂言（書上ノ外）の扱いであり、同流伝右衛門派では享保保教本・宝暦名女川本に収めるが、江戸期の主たる書上（享保・宝暦・天保）には見えていない。結局のところ、本曲を江戸初期以降一貫して正規の所演曲としていたのは、

和泉流のみと見てよいよつである。

まずは本曲の曲名に注目してみたい。曲名はすなわちシテの祖父の名でもあるのだが、現在、「財宝」(大蔵流)、「才宝」(和泉流)と、流儀によって表記が一定しない。読みも大蔵では「さいほう」「さいほう」の両様があり、和泉は「さいほう」と読む^③。また、鷲流においては「塞(賽)翁」「西翁(王)」等と表記し、「さいおう」と読んでいた。これは、シテの祖父が常に「人間万事塞翁が馬」と言つので異名を塞翁と呼ぶという設定なのである。しかし、そうした意味付けは、おそらく鷲流による附会であろう。享保保教本「塞翁」の前書には、次のように記す。

此狂言京流ノ狂言、外ニテモ用ル、鷲二八無之、仕様モ色々有之、勤ルナラハ能云合テ吉、催宝ト云テ只音齋老人一通ニスル流儀モアレトモ、道理難濟、但子細有之力、他流ノ事委ハ不知、人間万事塞翁力馬ト云心持ノ趣向吉

傍線部に注目したい。ここでは、本曲の素性を「京流ノ狂言」とし、「鷲二八無之」とする。京流は京都の群小流派を指すよつで、必ずしも和泉流の古称とは限らないが、少なくとも本曲が元來鷲流の所演曲ではないことを示しているのは確かであろう(先に指摘したよつに、本曲が江戸初期以降和泉流のみ正規の演目の扱いであったこともそれを裏付ける)。従つて、「人間万事塞翁が馬」の故事成語

を名の由来に結びつけるのは、やはり鷲流における後からの意味付けの可能性が高い。

これに対して、和泉流の「才宝」という表記は、近世初期の天理本ですでに用いられており、これは当然「さいほう」と読ませるはずである。本曲がもともと和泉流の所演曲であつたらしいこと、曲中(終曲部の拍子にかかつて孫の名を呼ぶところなど)でも、祖父の名を「さいほう」と発音していること等を考え合わせると、やはり、この「さいほう」という読みが本来のものかと推測されるのである。(なお、右の享保保教本前書にいう「催宝ト云テ只音齋老人一通ニスル流儀」とは、虎明本に、孫のせりふとして「しわひ人で、孫共に少も物をくれられぬ」とあるので、大蔵流のことらしいが、同流で「催宝」という字を当てた例を知らない)。

ところで、鷲流が当てた表記は後からの附会であるとしても、「さいおう」という読みについては、なお検討する価値があるようである。例えば、虎明本では、本文は「さいほう」と表記するのに対し、同本目録には「西応」と記している。これは明らかに「さいおう」と読める。この読みが大蔵流にもあつたことがうかがえるのである(同流享保九年書上「珍敷狂言」にも「さいわふ」と記す)。そもそも狂言の人物に固有の名が与えられている場合は、何らかの寓意が意図されていることが多い。この「さいほう」(または

「さいおう」の意味については、従来、宝の意味の「財宝」としてのみ解されてきたようである。^④

しかし、前述のように「さいほう」と濁らないのが本来の読みらしく、同時に「さいおう」という読みも古くからあったとすれば、ここに別の意味を想定することも可能なのではないか。少なくともこれが単に「財宝」の意味ではないことは明らかである。

「ここで想起されるのは、」ついで「さいおう」といつ言葉である。室町後期の辞書である『運歩色葉集』に、

宇思翁 申樂三番奏之詞也^⑤

とある。これは、三番叟の揉ノ段にかかる直前の詞(「和歌」と称する)に「おさへ」おひ。よさこびありや。わがこの所よりもほかへはやらじとぞおもふ(鴻山文庫蔵『式三番』)、「ハア ヲウサ イ」アフ、怡アリヤ、我子ノ所ヨリ外ハハヤラシトゾ思フ(享保教本)等とあることから、「おう」を「翁」にとりなして右のような字を当てたものと考えられる。この語の用例としては、近世の資料ではあるが、半井卜養『卜養狂歌集』春の部に収める、次のような狂歌を挙げることができる。

一 ある人のもとへ正月七日に行けるに七草のつたよめとありけれハ主をいわひて

うさいわつよるこびありや悦ひあれあとの太夫にすくなま

いらしよ^⑦

こうした用例があることから考えても、「さいほう」という祖父の名は、三番叟の詞である「おさいおう」を翁の名にとりなし、さらにそれに「財」の意をも含ませて着想されたのではなからうか。一試案として提出したい。

一、名付けについて

本曲の筋(プロット)の中心をなすのは、三人の孫に珍しい名を付けることである。その名を近世初―中期の諸流台本で見れば、「けうがり、やうがり、おもしろし」(虎明本)、「けうがり、やうがり、おもしろう」(天理本)、「ケウガリ、ヤヨウカリ、面白ウ」(享保教本)となっている。

こうした「変わった名付け」の趣向は、もともと古くからの笑話のパターンの一つであった。例えば、『沙石集』巻四「上人子持タル事」には次のような説話が見える。

信州ノ或山寺ニ上人アリ。三ノ腹ニ三人ノ子ヲモテリ。初ノ腹ノ子ヲバ、マメヤカニ忍々カヨイケレバ、上人ノ子ト云テ具シテ来レドモ、不審ニ覺テ、名ヲバ「思ヨラズ」トソ付タリケル。次ノ腹ノ子ヲバ、時ニ我房ニモ忍ビカヨイテスミケレバ、ヒタソラ疑ノ心モウスクシテ、名ヲバ「サモアルラム」トソ

付タリケル。後ノ妻ハ、ウチタへ家ニ置テ疑ノ心モナカリケル
 バ、其腹ノ子ヲバ、「子細ナシ」トゾ、付タリケル。(下略)

三人に変わった名を付けることが「財宝」と共通する。「財宝」の筋の背景には、このような説話の存在を想定することができよう。しかし、こうした「変わった名付け」のモチーフは他の狂言にも取り込まれているのであり、本曲の形成を考えるには、そうした類曲の存在も無視することはできない。

子供に奇妙な名を付けることを中心趣向とする曲には、「比丘貞」がある。この曲はすでに天正狂言本に次のように見えている。¹⁴⁾

一、一人出て子と呼ひ出す、今まで名を付けぬ程に名を付けんと言ふ、
 と言ふ、もつとも言ふ、有徳なるお寮を烏帽子親にせんと言ふ、
 酒肴以て行、お寮喜ぶ、酒盛りする、親も子も舞、後お寮ひ
 く人の烏帽子子とするはこれか初めの祝言なり、本よりお寮、お
 足もめゝもすつとはと以ければ、たゞ今の引出物、お足る^{おぢ}貫めゝ
 五十石、比丘貞に取らせ、これまでなれとて方丈は、く、眠

蔵さしてそ入にける、名をはあ大郎、名乗り比丘貞

有徳な尼がある子供の烏帽子親となつて名を付けてやる。尼が与えた「庵太郎」という名は、はかrazも愚か者の謂の「あん太郎」¹¹⁾と一致してしまつた。

「財宝」は、「この老尼をシテとする」「比丘貞」と対をなす曲とし

て発想されたのではなからうか。天正狂言本にも見え、織豊期の上演記録(天正十八年九月十八日、秀吉公毛利殿江御成之時御能)が存する、「比丘貞」の成立が先であると考えておきたい。

「比丘貞」との関係について、もう少し検討してみよう。虎明本以下の大蔵流「財宝」では、吝嗇な祖父から引出物の米銭をもらうのが孫たちの目的になつていた。

某八十にあまるおうぢを一人もつて御さあるが、事の外うとくにござれども、しわひ人で、孫共に少も物をくれられぬ、それがし思案をいたひた事がござる、孫どもあまたござる程に、談合いたひて、べいせんをもらはふと存る(略)皆々同心ならば、それがしたくみ出した事が、有、おうぢこそゑぼしおやにたのふで、名を付てもらはふ、名を付られたらば、少なりともくれられぬ事は有まひ程に、いざあれへ参つて申て見う(虎明本)これに対して、天理本以下の和泉流は烏帽子を着せてもらうことを目的とする。

某、うとくな祖父を一人持た、うとくなによつて、則、名をも才宝と申、わたくし斗ではない、まだ兩人孫が御さる、おうぢこのそくさいなうちに、ゑぼしをきせてもらひませうと談合いたいておいた、今日吉日なれば、申合てまいらう(天理本)この天理本の設定は、「比丘貞」と全く同じである。おそらくこれが

本来であつて、虎明本においては、「比丘貞」との重複を避けたため、右のような特異な設定にしたものと考えられる。

以上のように、「財宝」の「変わった名付け」という趣向は、一方では説話世界に根ざしつつ、他方では「比丘貞」のような類曲とも密接に関連すると考えられるが、この趣向に関しては、今一つ、三番叟の捺ノ段と鈴ノ段の間に行なわれる問答にも類例があることに注意しておきたい。

それは、三番叟問答の古態の一つである、「子徳人」（現行和泉流では「子宝」）である。すでに檜常太郎氏蔵『秘事集』、「三番サルガクノ云事」、鴻山文庫蔵『式三番』にも詞章が見えているので、室町期から存した可能性があるう。

アド、申所ニ・早タト立・近比祝着申て候・就其ソレガシハ・一段目出度者にて候・其イハレハ・子ヲ十人持て候 ソノ名ヲハ・何ト申ソ　・ヲトヤウ・姫ヤウ・松ヤウ・竹ヤウ・ダンダラ・イナゴニ・カイツク・スイツク・ヒウチ袋ト付タ「ヤアラ・ヲモシロイ・名ヤ

（檜常太郎氏蔵『秘事集』、「三番サルガクノ云事」）

サンバ、さん候それがし八とく人の中にもことく人にて候。こを十人もつて候が。上五人八玉をのべたるやうなるむすめにて候。下五人八るりをのべたるやうなるめなにて候。センザイ

「まつ八そろへて御もち候よ。サンバ、十人の子をくるまざにおゐてひと口によぶやうになをつけて候。センザイ、何と御つけ候ぞ。」まつおつとりちがへて　おとよ　けさよ　たつまつ　いるまつ　だんだら　いなごに　かいつく　ひつつく　ひうちぶ　くる　ぶらり　とつけて候。センザイ、あらめでたや一さし御まひ候へ。

（鴻山文庫蔵『式三番』）

老翁が複数の子に珍しい名を付けており、なおかつその名を呼んでみせることが「財宝」に近似する（名を呼ぶことは「比丘貞」にはない。「変わった名付け」の趣向は、一方で、こうした三番叟の問答から触発された可能性も考えられるのではなからうか。

ここで、「財宝」の祖父が孫たちに付ける名をもつ一度想起したい。その名は、「けうがり、やうがり、おもしろし」（虎明本）、「けうがり、やうがり、おもしろう」（天理本）であった。この名は一体どこから発想されたのであろうか。

これについても翁猿楽の詞章に注目すべき箇所がある。『享禄三年二月奥書能伝書』（観世新九郎家文書）、「式三番次第」に記載する「翁」詞章のうち、翁舞直後の謡に、

ケウカルコトカナ　ケウカリヲモシロシ　センシウハンセイノ
コキタウノマイナレハ　ヒトマイマワウマンサヅラク　サ「マ
ンサイラク　マンサイラク　座「マンサヅラク　チャウく

アンヨン云々¹⁴⁾

とある。右の「ケウカルコトカナ ケウカリヲモシロシ」は現行「翁」には見えない文句である。また、観世文庫蔵「五音三曲」に合写される『観世宗搦伝書』(天文四年奥書)所収「翁」詞章には、同じ箇所が、

やうかる事かな、やうかりおもしろき、よろこひの舞まわふ、
まんさいらく、く、まんさいらく、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く
くあむのんの御きたつ¹⁵⁾

とある。

さらに、現在の常の演出では用いられない千歳の謡(三日または四日目)にも、

千歳「ケウガル松哉、く、ヲガノ松 地「住吉ノ松モアリウ
ドウく……千歳「君ノ千年ヲ経事ハ、天津乙女ノ羽衣ヨ、ク
ウカル松哉くヲカノ松…… (享保教本)

というのがある。ちなみに、この詞章によそえた狂言風流が「おがの松の風流」である。

只今千歳ぶるの御言葉に、けぶがる松哉おがの松と宣へは、次第に住吉の松と仰せられ候間、…… (虎明本 風流之本)

翁猿楽の詞章には、このように「けうがり(る)」「やうがり」「お

もしろき」という言葉が古くは存したのである。「財宝」で祖父が孫たちに付ける名には、こうした言葉が参照・利用されたのとはなからうか。右に引いた「おがの松の風流」がそうであるように、多くの狂言風流が翁猿楽の文句によそえて発想されていることを考えれば、そうした可能性はやはり一概に否定することはできないのである。

三、拍子にかかって名を呼ぶこと

大蔵虎明本では、最後に、祖父が物忘れしやすいので、孫の方から「拍子にかゝつて」名を問うことを勧める。

「……物覚がなひが、何とぞして、忘れぬやうにしたひ、
あらはこなたの拍子にかゝつて、さいほうが、まごぢやくしの、
名をは何といふやらんと仰せられひ、こたへまらせう程に」

(虎明本)

「さいほうがまごぢやくしの、名をは何と申ぞ、「けうがりも候、やうがりも候、おもしろしも候 (同)

鷺流・享保教本も虎明本と同じく孫からの提案とする。

ところが、天理本以下の和泉流では、祖父の方から「のぞみがある」とて、唐突に「ひやうしにかゝつて」孫の名を問うことを言い出すことになっている。

シテ、めでたう三人の孫共の名をひやうしにかゝつてとわふほどに、ひやうしにかゝつてこたへてくれい」と云 (天理本)

シテ、「才宝が孫どもの、名おばなにと申ぞ、く、けうがりも候、やうがりも候、おもしろうも候」 (同本抜書)

物忘れをしないためにという大蔵流・鷲流の行き方は、拍子にかかつて名を問うことを合理化するための意味付けであろう。それに対して、和泉流の行き方がやはり古態を示すものと考えられる。

ここには、イ口詞(天理本抜書・和泉家古本抜書)やフシ(虎明本・享保保教本)による「拍子にかかる問答」という演戲(劇以前の芸)の存在が想定される。そうした演戲を核として本曲が形成されたことを、この祖父が孫の名を呼ぶくたりは暗示するものといえよう。そして、このような「拍子にかかる問答」は、先に比較・検討した「比丘貞」には全く存しないのである。

従って、「拍子にかかる問答」については、自ずから「比丘貞」以外に、その拠りどころを求めざるを得ないことになる。それは、実は三番叟の問答に見出だすことができるのである。やはり、三番叟問答の古態の一つに、「田歌」がある。これも檜常太郎氏蔵『秘事集』、「三番サルガクノ云事」、鴻山文庫蔵『式三番』等に詞章が記されている。三番叟が拍子にかかつて(田歌節で)相手の名(アドの大夫)を呼ぶものである。

アド、申所二・ハヤ／＼ト御立・祝着に存候・サテモソレガシ
八・ヲサナキ・時ヨリ ホナル者ニテ・拍子ニカ、リテ・
人ヲヨビ申事ガスキ・にて候・間・アドノ大夫殿ヲ・拍子ニ
カ、リテ・ヨビ申サウズルガコタヘ・アラウズルカ「先御ヨ
ビ候へ・コタヘテ見申候ベシ」(下略)

(檜常太郎氏蔵『秘事集』、「三番サルガクノ云事」)
これは右に述べた「財宝」の終曲部において、祖父が孫の名を拍子にかかつて呼ぶ趣向と類似するのである。「拍子にかかる問答」は早く三番叟問答に存したのであり、こうした演戲が本狂言に影響を及ぼすことも、またありうることはなからうか。¹⁵⁾

なお、天理本終曲部のシテを手車に乗せる趣向は、女狂言の「鈍太郎」(原形である「女楽阿弥」が天正狂言本にある)とも共通する。同曲の影響があるかもしれない。ただし虎明本・享保保教本は手車に乗せることはない。

四、(付)「笑祖父」のこと

「笑祖父」という狂言がある。これは現在 鷲流仁右衛門派の江戸末期の台本(型付)である『遺形書』(法政大学能楽研究所蔵)によつてのみ、その本文を知ることができる曲である。孫一人が、祖父を見舞いに行くと、祖父は笑いころげながら、若い頃の花見の

話をし、盃を重ねてめでたく舞つ、といった内容である。

西本願寺蔵『近世京都等能番組集』によると、延享五年二月二十七日の「禁裏様御能組」に、「笑祖父」が演じられている。¹⁴⁾ 演者は横他三郎・同又二郎・同吟二郎・周防八右衛門の四人である。『遣形書』によれば、「笑祖父」は二人で演じることになっているが、このように四人（孫が三人になるのであろう）出る演出もあつたわけである。その場合は「財宝」の人数と同じことになり、同曲の影響があつたことも考えられよう。

『狂言辞典 事項編』（東京堂出版、昭52）「笑祖父」の項によれば、大正十一年の野村又三郎信英編の名寄に「別物」として「笑祖父」が見えるが、同家に伝書が現存せず、同曲かどうか不明とある。また、南大路玄叟（明治・大正期の和泉流役者、京都在住）と三宅惣三郎（明治期の同流役者）との往復書簡にも、「加州公ニテ出来狂言」の一つとして「ワライ祖父」が挙げられており、¹⁵⁾ 本曲が和泉流に番外としてあつたことが確認される。延享五年に禁裏で演じられた「笑祖父」は、この和泉流番外曲であつた方（『遣形書』所収のものとは別曲の可能性もあるか）かもしれない。

ともかく、『遣形書』によつて見ると、この「笑祖父」にも三番叟との関連が顕著に認められるのである。まず、曲名の下に「烏塞翁トモ」と記す。別名を「烏塞翁」と称するといふ意味であるが、先

に指摘したように、この「ウサイオウ」という言葉は三番叟の和歌に基づくものである。

また、祖父の舞の詞章にも、三番叟問答と共通する箇所がある。

いまや千秋万歳の。ちはこの玉の数々。ふらり〜とふり烏帽
子象もんつくるふきそ初め。ゆどの初にあらへとも。千歳ふり
し此祖父。……

傍線部が、三番叟問答の一つである「烏帽子の祝儀」の、

三番叟「ケ様ニ天下治り、目出度折カラナレハ、此所へ七珍万
宝力、フラリ〜ト降烏帽子候
（享保保教本）

という詞章に拠っていることは、これまた明白である。

さらに、その装束付には、シテ祖父の立立について「面黒刷か或八翁ノ面ニテモ」とあつて、三番叟（翁猿楽）との関連をはつきり示している。

本曲は、近世に入つてから作られたものであろうが、三番叟の影響が、本狂言―しかも祖父をシテとする曲に確実に及んでいる例である。このような曲の存在は、「財宝」の形成を考える際にも参考となる。

おわりに

かつて、折口信夫氏は、独自の芸能発生論により、翁猿楽のモトキとしての脇能の発生を説かれた^④。しかし、猿楽にとつての根本芸というべき翁猿楽の能・狂言への影響—とりわけ狂言との関連は、その後あまり具体的に考えられることはなかった。本稿において考察した「財宝」は、たまたま祝言性の濃厚な曲であり、大蔵流では脇狂言の扱ひもされている。むろん、すべての脇狂言が翁猿楽から影響を受けているとはいえないであろうが、以上に見てきたように、「財宝」に限っていえば、シテの名・孫に付ける珍しい名、拍子にかかつて名を問うこと等に三番叟（翁猿楽）との関連がそれぞれ見出だされるのである。また、近世の成立と考えられるが、「笑祖父」のように、明らかに三番叟に拠って作られた老翁をシテとする狂言の例もある。

「財宝」という狂言は、奇妙な名付けの説話や「比丘貞」のような先行作品から触発されつつ、同時に、三番叟（翁猿楽）の詞章・芸態の影響を受けて形成された可能性がある。本狂言が、その形成において、三番叟（翁猿楽）からの影響を受けたことを推測しうる一例といえようか。

注

① 現在、大蔵流では「財宝」、和泉流では「才宝」と表記する。本稿で

狂言「財宝」考

は、以下曲名に關しては、大蔵流現行の表記に従うが、その読み方については、すぐ後に問題にする。

② 拙稿「狂言「今参」考」(山口県立大学国際文化学部紀要)5、平11・3)においても、「今参」と三番叟との関連について考察した。

③ 大蔵流山本家では、「さいほう」、同流茂山派では、「さいほう」と読む。なお、和泉流でも、かつて「財宝」と表記した名寄があった。小林責氏「狂言曲目の名称と表記について」(武蔵野女子大学能楽資料センター紀要)11、平12・3)参照。

④ 池田廣司氏・北原保雄氏「大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上」(表現代社、昭17)、「財宝」頭注等。なお、新野雪祭に、田楽衆の先導として「さいほう」という役が出るが、語義不明。従って、今のところ本曲と特に関係付けることはしない。

⑤ 京都大学文学部国語学国文学研究室編「元龜二年京大本 運歩色葉集」(臨川書店、昭11)所収の元龜一年本による。

⑥ 三番叟の和歌の意味については、山脇和泉元業書写「一子相伝の秘書」に、「此、おさへく、ト云意ハ、おほさいはひ、ト云事ヲ、ツ、メテ、おさへ、ト云タル事也、大幸、ノ意也、お、ト云ハ、ソヘタル事ニテ、歡喜ノ、心也」という説を記す。なお、井浦芳信氏「日本演劇史」(至文堂、昭38)に、春日若宮おん祭の細男の詞章(現在はなし)に、「おほ幸ありや、おほ幸ありや、吾が所よりほかにはあらぬ泉まし」等という文句があったことを指摘する。

⑦ 近世文学書誌研究会編「近世文学資料類從 狂歌編」(勉誠社、昭53)所収松村博司氏蔵本(松会版)による。

⑧ 『醒睡笑』巻二「名付け親方」には珍妙な命名の話を列挙する。また「変わった名付け」の趣向を法名に応用した狂言には、「京金」、「呂運」がある。このうち「呂運」については、拙稿「狂言「呂運」考」(山口

皇立大学国際文化学部紀要』6、平12・3）参照。

- ⑨ 日本古典文学大系『沙石集』（岩波書店、昭41）所収の梵舞本によるこの説話と本曲の趣向との類似については、すでに池田廣司氏・北原保雄氏『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上』「財宝」頭注が指摘している。

⑩ 以下、狂言台本の引用に際しては、適宜漢字を当て、仮名を統一し、読点を付すなどして、手を加えた箇所がある。

⑪ 蜂谷清人氏『あん太郎』の命名をめぐって（『狂言台本の国語学的研究』笠間書院、昭52所収）。

⑫ 表章氏『式三番』の周辺（『能楽史新考二』わんや書店、昭61所収）による。

⑬ 注⑫に同じ。

⑭ 注⑫に同じ。

⑮ 野上記念法政大学能楽研究所編（表章氏執筆）『観世宗家所蔵文書目録（付解題）九』（『観世』昭48・1）。

⑯ 天野文雄氏『翁猿楽の成立をめぐる諸問題』（『翁猿楽研究』和泉書院平7所収）による。

⑰ 注⑫に同じ。

⑱ 「拍子にかかる問答」は、その他「今参」「昆布柿」「伊文字」等にも存する。このうち、「今参」の問答についてはやはり三番叟問答との関連が考えられることを注⑫の拙稿で指摘した。

⑲ 『近世京都等能番組集』の概要については、小林英一氏「江戸中期の宗祖遠忌能 西本願寺文書『近世京都等能番組集』から」（『本願寺史料研究所報』17、平8・5）参照。この上演記録の調査については宮本圭造氏の協力を得、大阪大学天野研究室蔵のコピーを見せていただいた。伊藤正義氏「明治・大正期の京都における和泉流狂言——南大路玄叟・

同南動翁をめぐる」（『人文研究』39—1、昭62・12）による。

⑳ 折口信夫氏「古代演劇論」（『折口信夫全集 第十七巻』中央公論社、昭42）、「脇能の発生」（『折口信夫全集 ノート編 第五巻』中央公論社、昭46）等。